



文章の書き方、そしてメディアの在り方

座談会：原 英俊氏、
参加者のみなさま、岡本 和久
レポーター：赤堀 薫里

岡本 | 新聞記事は、前工程としての取材という活動があり、それをどうまとめて文章にするかという作業なので、単なるモノを書くというプロセスとは少し違いがあると感じました。私が、以前の会社にいた時に、アメリカで、米大統領のスピーチのアドバイザーをしていた人からレッスンを受けたことがあります。その時に印象に残っているのが、お詫びの仕方です。「自分で何かしでかしてしまった時に、お詫びのポイントを4つ選んで考えなさい」と言われました。その後、記者から質問を受けた時に、全て4つのポイントに関連付けて答えれば、質問を受けるたびに、自分の言いたい4ポイントが、自然と相手の頭の中に入るといいます。エクソンやジョンソン&ジョンソン等のケーススタディーも行いました。ポイントを絞ってどうやって相手に印象を残していくのか、という視点からメッセージを発信していくことが、似ている所があり、非常におもしろく聞かせていただきました。もう一人、親しいアメリカのポートフォリオマネージャーは、一緒に日本の企業訪問をした後に必ず「今のミーティングの3ポイントは何？」と聞いたものです。企業で1~2時間、取材をした後、内容をお互いに議論をして3ポイントにまとめます。それは非常に効果的な方法でした。後になって3ポイントを思い出すと、ミーティングそのものに加えて、そのファンドマネージャと話をした内容も思い浮かんできます。誰かに何かを説得する時や、テレビや本を読んだ内容を伝える時に「最も大切な3ポイントは何だろう」、というトレーニングをすることは非常に大切だと思います。文章だけに限らず、言葉はコミュニケーションのツールです。いかに効果的に使うかということは、重要なポイントだと思います。



原 | 日本の謝罪会見で、新聞記者に突っ込まれやすい人は、何が原因なのか自分で把握できない、自分の立場や会社の立場を考えているのがミエミエで、邪心があり客観性を欠いて



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

います。

岡本 | 最近、お詫び会見は掃いて捨てるほどありますが、あまりいいお詫び会見はありませんよね。

原 | 新聞記者にとっては、謝罪なんかしてほしくない。それよりももっと大事なことがある。どう原因追及をして、どう手だてを考えるのかを聞きたいのにそれがない。経営者は何か思い違いをしていますね。「謝罪すればいいだろう」と思っている、日本の社会の価値観はずれていきますね。

参加者 | 「文章を書く時は、接続詞をできるだけ使わない方がいい」とお話にありましたが、プレゼンは逆です。接続助詞は使わない方がいいけれど、接続詞は使った方がいい。話す時と書く時は違うと思いますが、なぜ書く時は、接続詞を使用しない方がいいのか教えてください。

原 | 文章としてはうっとうしいからです。歯切れがよくない。

岡本 | 逆に話す時に接続詞を使った方がいいのは、思考を繋ぎ止めることができるからかも知れませんね。紙面のように情報が目から入る場合は前に戻って確認することが簡単ですが、耳からの情報は戻れない。だから接続詞を入れて聞き手の注意を惹きつけておく必要があるのではないのでしょうか。

参加者 | 間合いをとることができますよね。

岡本 | Sさんは月刊誌の編集長としていかがですか？

Sさん | 私は出来るだけ、それぞれ持っていらっしゃるボキャブラリーやリズムを殺さないようにしています。でも正直に言って、下手な人ほど、一文が長い。段落を変えない。自分で書いていても思いますが、前後の意味合いをはっきりさせる為に、接続詞を書きたくなくなってしまいますね。人の文章を見ていると、読みにくい文章ほど接続詞が多いです。濁点、句読点の使い方も気になります。新聞の文章がタイトで一番シンプルなのは事実ですが、最近気になるのは、その中に出てくる新しい文体です。例えば「結果、…」という言葉が普通に使われています。新聞であればそれで許容できますが、普通の文章で初めて見た時は気持ち悪かったです。もう一つ、「関係」と「関係性」という言葉の区別がなく、「関係」で済む場所に、「関係性」を口語でも文章でも使う人が非常に多い。かなり知的な人でもその区別を認識していない。長い文章と短い文章や、考えさせる文章で使う言葉の違いが無くなってきていると感じます。



長期投資仲間通信「インベストラيف」

原 | 原稿を書くときも実は3つの構成で書きます。3つ以上ですと、覚えきれないし、それ以上の要素を入れると散漫になるので、それ以上は書けないですね。

S さん | 初心者ほど長い文章で書いた時に、出だしのウォーミングアップを人に読ませてしまう所がありますが、ほとんど最初の1~2段落を切ることができます。結論をリードに持ってきた方が、読みやすい文章になりますね。

原 | デスクになって思ったのは、記者は虚栄心の塊です。読んでもらいたいという媚びる思いがあるのでしょう。大作家ではないのだから普通の原稿でいいわけですよ。

参加者 | 僕は取材を受けた後、その記事を読むと、その記者の人格がわかります。「虚栄心が強いな、嘘つきだな、真面目だな、誠実だな」と。やはり人の言った言葉の使い方ですね。まるで自分が言っているように書くずるい人もいますよね。

参加者 | 取材にいらっしゃる時に、既に結論が決まっている方がいらっしゃいますよね。もうちょっと素直に聞いてほしい。このコメントだけをとる為に、それを言わせるために一生懸命引っ張る人がいますよね。

参加者 | 媒体を見て思うことは、クオリティーペーパーでも大衆的なものでも全く関係ないということです。立派な新聞社の記者の人だから、良い記事を書いてくれるわけではないですね。週刊誌レベルの記者さんが、「こちらの行った通りのことをこんなに上手にまとめてくれるの?」という優秀な人もいます。記者さんの属人的な能力、パーソナリティーによるので、こちらの思い込みで媒体を選ばない方がいいでしょう。

岡本 | そう意味では、所属している組織とあまり関係なく、記者そのものの能力を発揮する余地がある商売だというわけですね。

参加者 | もしかしたら、クオリティーペーパーよりもそうでない所の方が、自由度があるのかもしれませんがね。

参加者 | 最近「ジャーナリストって何なのかな?」と疑問に思っています。日本は「中立の立場で書け」と、絶えず言います。私は、Aで良いと思いつてきたものが、「AもあってBもある」というように「反対意見を必ず載せなさい」という訳です。その比率がデスクに行くに従ってどんどん半々になっていき、「この記事ってこんな内容だっけ?」ということがあります。海外は自分の信条をはっきりさせています。どこまで自分の主張を書いて良いのか、中立ってなんなのか考えるところがあります。無理矢理、反対意見を載せて、紙面を半々にすることが中立なのか、でもそれは違うのではないかと思います。どうでしょうか。



長期投資仲間通信「インベストラيف」

原 | 新聞社が会社組織になってしまったからだと思います。リーガルリスクが怖い。名誉棄損で訴えられたらうっとうしい。客観性というものが、益々要求されるようになってきている。でもそれは、無駄な要素を沢山記事の中に入れるわけです。

参加者 | 海外のように、記事は全てサイン入りにして責任とればいいわけですよ。

原 | 数年前にある新聞社が、署名入りを率先してやったら、ある記者が引き抜かれました。それで「止めようか」という流れになりましたね(笑)。

岡本 | 全てのメディアが、中立でなければいけない必要性があるのでしょうかね。NHK はちょっとわからないですけど。

原 | いや、ないでしょうね。

参加者 | 読者が、わかって読んでいればいいでしょうね。

岡本 | 「メディアが中立でなければいけない」という思い込みがなんとなくありますが、「この新聞社は巨人が好きだ。こちらは民主党が好きだ」というようなレベルの好き嫌いをもう少し出してもいいのではないのでしょうかね。テレビも同じですけど。

原 | メディアもテレビも同じですが、装置産業の時はマスを目指さざるをえなかった。しかし今は装置産業の時代ではない。輪転機に何億円も必要ない。今、有名人は皆ブログを書いています。そうすると新聞記者がいらないですよ。メディアで働く人間がいらなくなってきている。価値のあるものを一部の人が持っている時代ではない。装置産業の時代にかかっていたコストが、かからなくなってきた。

参加者 | ニュースバリューをスクリーニングしてくれて、「自分が欲しいものと思いが合うのは何処か」という基準になってこないと、メディアの価値がなくなってくるかもしれませんね。

原 | これからのメディアは、プロダクションになってくるでしょう。個別にカスタマイズされてくる時代。形態が変わっていくでしょうね。

岡本 | 文章の問題からメディアの在り方まで興味深いお話をありがとうございました。